

# 朝鮮を駆けた近江商人 三中井

槇 良生

## 1. はじめに

かつて琵琶湖の東、五個荘(ごかしょう)から朝鮮半島に進出し、活躍した近江商人がいた。「三中井」を創業した中江勝治郎・久次郎(西村姓)・富十郎・準五郎の四兄弟である。彼らは日露戦争(1904-05)の最中、朝鮮に渡り大邱(テグ)に「三中井商店」を設立した。明治・大正・昭和と激動の時代を生き抜き、最盛期には18ヶ店を要する一大百貨店網に成長したのであった。敗戦とともに「三中井」は崩壊し、彗星のように一瞬その輝きを放った後に、その歴史は戦後の混乱の中に消えていった。なぜ、三中井はこんなに急速に成長することができたのだろうか。そして、なぜあっけなく崩壊して、再建にはいたらなかったのか。今回は主人公の中江四兄弟に焦点を充てて、三中井百貨店の発展のために奮闘した多くの人々の息吹を感じながら、朝鮮を駆け抜けた近江商人の歴史ロマンに触れていきたいと思う。

## 2. 中江四兄弟の登場

明治5年(1872)滋賀県神崎郡五個荘町金堂の呉服・小間物商「中井屋」に長男善蔵が誕生した。五個荘金堂は近江商人のうち、湖東商人と呼ばれ多数の近江商人を生み出した。近江商人にはこの他に、八幡商人、日野商人、高島商人などがある。中江家も「持下り商い」を営んでいた模様で、商品を前持って現地に送っておき、そこへ行っては天秤棒を担いでそれを売り捌くのである。この長男善蔵こそ、中江家八代目を継ぎ、3人の弟達とともに「三中井」を築いた三代目中江勝治郎である。これに続いて、明治9年(1876)次男久次郎、明治11年(1878)三男富十郎、明治19年(1886)五男準五郎が誕生した。(四男米三郎は夭折した)次男久次郎は幼くして金堂の西村家へ、三男富十郎も神崎郡日吉村の山脇家に養子に入った。三代目勝治郎(善蔵)は明治20年(1887)明新学校高等一級を卒業後、姉なかの嫁ぎ先の山脇五兵衛方に奉公し、美濃・伊勢・尾張方面に呉服卸商の見習いを始めた。明治30年(1897)父2代目勝治郎が死去したため、25歳の善蔵は山脇家を辞して家業「中井屋」を継承、名を勝治郎(三代目)と改めたのである。

明治30年(1897)勝治郎が家業を継いだのとほぼ同時期に山脇家を辞した富十郎は西日本を転々とし、明治36~37年(1903~04)遠縁の佐賀県唐津の丸橋呉服店に奉公した。富十郎は「その土地で一番になること」を目標に懸命に働き、主人から跡継ぎにと望まれたが、これを辞して朝鮮に渡ったのである。富十郎のこの頑張りのエネルギーの源になった話が伝わっている。

富十郎が山脇家で持下り商いをしていた頃、伊勢の大店の主人を訪ねた。主人の好意で「庭に面した座敷で昼弁当を使っていた」ところ、奥方が突然やってきて、富十郎を「虫けら」でも打ち払うように追い出した。「ご主人が好意で招き入れてくれた」と説明する間もなく、富十郎は「死ぬほどの屈辱」を受けたということであった。このことが「大きくならなければ、一番にならなければ」商人としての成功とは言えないという強い信念が形成されたと思われる。(林『幻の三中井百貨店』から要約抜粋)

「悔しさに身を任せるな、それを仕事で昇華するように」、これが富十郎の家訓であったようだ。丸橋呉服店を辞めるかなり前から、富十郎は幾たびか釜山に渡っていたと思われる。下関からの連絡船で渡った際に、現地で衣類、タオルなど売却を乞われたという。朝鮮では日本製品が飛ぶように売られていたのであった。

### 3. 朝鮮への進出と当時の半島情勢

14世紀末に誕生した李氏朝鮮は中国の明、清から冊封を受けていたが、19世紀に入るとその体制も綻びが目立つようになった。それでも李朝は鎖国体制を続けていたが、急激に近代化を成し遂げた日本により、明治9年（1876）に日朝修好条規を結ばされ開国を強制されたのである。その当時、対外強硬策を支持する大院君に対して、その息子高宗の妃である閔妃（みんぴ）とその一族の内部抗争が激化しつつあった。

明治27年（1894）民衆の不満が高まり東学党による大規模な反乱が勃発すると、これを口実に日清両国は軍事介入して日清戦争へと突入する。これに日本が勝利すると朝鮮は清から独立したが、内部抗争はなおも継続し泥沼化しつつあった。守旧派は三国干渉後に日本の影響力が減ると、清に代わって新たに台頭してきた南下政策をとるロシアに接近した。これに危機感を持った日本公使三浦梧楼は親露派の中心である閔妃一族の排除を決行したのである。明治28年（1895）10月8日未明、景福宮に日本軍守備隊等が乱入し王妃を殺害した。これを乙未（ウルミ）事変と呼ぶ。これにより開化派が政権に復帰したが、明治29年（1896）2月親露派がクーデターを起こして政権を奪還し国王をロシア公使館に移したのである（露館播遷）。このような内部抗争に終止符が打たれるのには日露戦争を待たねばならなかったのであった。

次に当時の社会構造を見てみよう。李氏朝鮮では王族を権力の頂点として、両班、中人、常民、賤民の順に階級社会が成り立っていた。特に両班は貴族階級として納税や兵役などすべて免除され、富と権力を掌握していた。明治27年（1894）朝鮮を訪れた英国の旅行家イザベラ・バードは、その著書『朝鮮紀行』の中で次のように述べている。「朝鮮には階級がふたつしかない。盗む側と盗まれる側である。両班から登用された官僚階級は公認の吸血鬼であり、人口の4/5をゆうに占める下人は文字通り「下の人間」で、吸血鬼に血を提供することをその存在理由とする。」と。

三中井の朝鮮進出は、当時の極東アジアの政治情勢、特に日本、清、ロシアが支配権を巡って争っていたことと関係する。日本政府は権益確保のために移民(特に商人)を奨励し、経済活動を支援した。それに伴い日本人居住者は急激に増加したのであった。朝鮮が有望な市場であることを確信した富十郎は勝治郎に報告し、この商売を成功させるには兄弟全員の一致協力が必要と説いたのだろう。四人の兄弟は明治38年（1905）1月朝鮮大邱（テグ）において「三中井商店」を創業開店したのである。

### 4. 三中井呉服店の発展

「三中井商店」は当初は現地の朝鮮人向けに雑貨を販売していた。業績は順調に伸びてはいたが、日露戦争後になると内地から日本人居住者が急増し、この要望に応える形で先祖伝来の呉服店に回帰することになった。明治40年（1907）新たに店舗を移転して、店名も「三中井呉服店」と改名したのであった。住友とよく似た井桁マークを商標とした。「中井屋」以来ずっと使用されてきたとのことである。

明治 39 年（1906）日露戦争の従軍から帰還した次男久次郎が経営に参加し、晋州に支店を開業した。日韓併合の翌年、明治 44 年（1911）郷里の家業を廃業し、京城（ソウル）本町に主力を移して支店を開設した。翌年には隣接地を買収して店舗を新築している。大正 3 年（1914）元山支店の開店、大正 6 年（1917）京都仕入部及び釜山支店の新設、大正 8 年（1919）平壤支店の開設と続き、大正 11 年（1922）資本金 200 万円の株式会社三中井呉服店を設立し、本社を京城に置いて社長に勝治郎が就任したのであった。その後も次々と出店をしており、勢いは止まらない。大正 12 年（1923）東京支店、昭和 3 年（1928）興南店、昭和 4 年（1929）京城本店新館（5 階建）、昭和 7 年（1932）光州支店、大田支店と続くのである。

次に兄弟 4 人の役割分担について見ていこう。勝治郎は創業以来朝鮮に居住し経営にあたったが、大正 5 年（1916）金堂に帰郷し、実務は 3 人の弟達に任せて本宅で采配をふるった。信仰心の熱い信頼できる人物だったという。久次郎は晋州店や元山店の店長として勝治郎を補佐していたが、大正 5 年勝治郎とともに郷里に帰郷すると、京都仕入部長に就任し仕入、総務、経理の責任者になった。「渋久」とあだ名されるほど堅実な経営だったようである。三男富十郎は豪放磊落で社交性に富み、政界、軍部との人脈構築にその才を如何なく発揮した。大正 5 年（1916）京城本店長に就任、朝鮮総務として朝鮮全域の支店網の管理運営にあたった。五男準五郎は病弱だったが、富十郎の片腕となり、主要支店長を歴任することとなったのである。4 人の絶妙のバランスで三中井は運営されたのであった。

## 5. 朝鮮・大陸の百貨店王

三越は大正 3 年（1914）株式会社三越呉服店から株式会社三越の改称、百貨店化の道を進み始めた。2 年後三越京城店を早くも開設し、朝鮮においての百貨店事業を開始したのである。三重の商人を源流とする丁子屋は大正 10 年（1921）、株式会社丁子屋百貨店を京城に開設した。さらに大正 15 年（1926）平田屋が、三中井と同じ本町通りに平田屋百貨店をオープンしたのであった。一方、三中井は大正 11 年（1922）株式会社三中井呉服店として株式会社として発足したが、内情は呉服店のままであった。勝治郎は百貨店化が必要と考えていたと思われるが、五個荘金堂にあって朝鮮は富十郎に任せており、相互の情報伝達は不十分であったと推測されるのである。こうした経緯で勝治郎の海外視察が実現したものであろう。

大正 13 年（1924）6 月 10 日、勝治郎は神戸港からウィルソン号に乗船、米国の百貨店や小売業の視察旅行に出発した。大陸を横断して、9 月 10 日横浜着で帰国、81 日間に及ぶものだった。この間のできごとを勝治郎は毎日克明に手帳に記している。林著の『幻の三中井百貨店』によると、「百貨店では、店内の大きさと豪華さや綺麗さ、“昼をあざむくばかりの”明るさ、豊富な品揃えに驚嘆した」「商品はすべて陳列式の陳列台を使っており、商品と商品の仕切りは熱いガラスでできている」「販売員はすべて女性でとても熱心・親切である」・・・勝治郎はここから、陳列のポイントは顧客が自分の経済力に応じて欲しいものを選べる便利さにあることを理解したのであった。

百貨店だけでなく勝治郎は人々の日常生活や暮らしぶり、博物館、美術館、大学、公園、工場などありとあらゆるものを見て回ったのだった。勝治郎がロサンゼルスに滞在していた 7 月 1 日に新移民法（日本人のアメリカへの移民を禁じるなど）が成立した。この法律が成立する以前から日米関係はきしみ始めており、日本国内でも次第に反米感情が蠢きつつあったのである。勝治郎は、日本には

官民一体となった移民に対する建設的な国策がなく、過去 50 年間血と汗を流して努力してきた日本人移民を見捨てていると憤慨している。しかも日本人はアメリカで 2、3 流民族のランク付けしかされていない、と嘆いているのである。つまるところ、これは国力の差であると考えたのであろう。これが後に三中井が朝鮮・満州で国策に協力し、御用商人化してゆくことに繋がってゆくと思われるのである。

この貴重な視察旅行は、その後の三中井に多大な影響を与えた。昭和 4 年（1929）、京城本店和風二階建ての店舗の奥に、五階建ての白亜の新館が落成した。館内にはエレベーターが設置され、商品は呉服だけでなく、生活実用品、洋服、雑貨まで多様に揃えられ、四階大食堂、五階臨時特別陳列場、屋上には遊戯スペースが設けられた。ようやく三中井は百貨店へと変貌してゆくのであった。昭和 8 年（1933）9 月、待望の新店舗が完成した。これは昭和 4 年に開設した店舗の隣地を買収して、地上六階地下一階建の近世ルネッサンス様式鉄筋コンクリート造りの巨大なものであった。内部には、高い天井に瀟洒なシャンデリアを設け、エレベーターやエスカレーターを設置したものになった。当時、京城には三越のほかに、丁子屋、平田百貨店、和信百貨店（昭和 7 年開店）と三中井の 5 店舗が激戦区で戦うことになったのである。昭和 9 年（1934）株式会社三中井に改称し、系列会社も積極的に設立している。昭和 10 年（1935）株式会社三公社商会（洋服の製造販売）、同 13 年（1938）には東亜三中井（満州・中国における三中井百貨店の統括）を設立している。

昭和 15 年（1940）には、三中井は本部を金堂として本社を京都に置き、三中井百貨店は本社・本店を京城とし、釜山、平壤など 12 か所設置した。東亜三中井は本社・本店を新京に置き、支店を奉天、北京など 5 か所など、一大組織に成長した。昭和 10 年の朝鮮・中国における本支店の従業員数は男子店員 544 人、女子店員 436 人、工場従業員 1,216 人、総計 2,196 人にのぼった。京城店のみの三越に対して、三中井は本支店を合わせた総売上高で三越を超えて朝鮮で最大となった。かくて、「朝鮮・大陸の百貨店王」と言われるまで成長したのであった。

## 6. 日本統治下の朝鮮半島

それでは次に当時の朝鮮半島の政治・経済状況を見ていこう。高宗は 1897 年皇帝に即位し、国号を朝鮮国から大韓帝国へと改めた。彼は「光武改革」と呼ばれる上からの改革をしようとした。このあたりについては、イザベラ・バード著の『朝鮮紀行』に詳しい。日本・ロシア・清という 3 国のパワーバランスの上に成り立つ危うい政権は日露戦争の結果を受けて、日本による保護国化に進むことになり改革は中断した。1905 年、第一次日韓協約により、韓国の外交権を剥奪し、翌 1906 年統監府が設置され伊藤博文が初代統監に就任した。伊藤は「日本は韓国を合併する必要なし。合併は甚だ厄介なり。韓国は自治を要す」と当初併合には否定的であったが、ハーグ密使事件（1907 年）などを経て併合を容認する方向へと転換していった。1909 年安重根による伊藤博文暗殺により併合の流れは決定的となり、翌 1910 年韓国併合条約が結ばれ、大韓帝国は消滅したのであった。

続いて日本の進めた統治政策をみてゆくと、大きく 3 つの施策が浮かび上がる。まずは両班の支配と差別を完全撤廃した「民籍法」である。1909 年戸籍制度を導入し、それまで姓を持つことを許されなかった賤民階級にも名字を名乗らせたのである。身分解放に反発する両班は抗議デモを行ったが政府により鎮圧された。2 つ目は「土地調査事業」である。大規模に測量調査を実施して、広さや所有権を確定した。これにより両班によい隠ぺいされていた土地は安価で農民に払い下げられた

が、権利関係を明確にするに留まったため、申請をしなかったために土地を没収された農民も多く、「日帝による土地収奪」として悪感情を残すことにもなったのである。3番目の施策は教育である。1911年朝鮮総督府は第一次教育令を公布、ハングルを初等教育の段階から必須とし、朝鮮の識字率は1910年に6%程度だったものが、1943年には22%に上昇したのであった。これまではハングルは知識層には排除されていたため、ハングルの普及には効果があったが、学校教育の言語が日本語だったこともあり、韓国では反発も多かったと思われるのである。

この間、朝鮮経済は順調に成長した。当時の総督府の「内鮮一体化政策」は大きな影響を与えた。「北に満州国があり、南に内地がある。その間をつなぐ朝鮮の役割は大きい」との前提で商工業への投資も奨励し、事実増加したのであった。1929年にはじまる大恐慌で日本国内は大変な不況の中にあっただが、朝鮮経済の回復は早かったのである。太平洋戦争の末期、日本国内は焦土と化していたが、朝鮮半島には大きな攻撃はなかった。米軍のB-29はマリアナ諸島や中国四川省の成都から出撃していたため、攻撃圏の限界に位置していたからだと思われるのである。半島においては総督府は徴兵制には慎重であった。三・一独立運動（1919年）のようなものを恐れていたと思われ、その導入は特別志願兵制度（陸軍：1937年、海軍：1943年）を経て、1944年まで実施されていない。韓国併合は朝鮮社会の近代化に一定の役割はあったと言えるであろうが、日韓関係の歴史に大きな禍根を残してしまったのである。

## 7. 三中井百貨店の衰退と崩壊

昭和14年（1939）勝治郎は高齢を理由に68歳で引退し、江月と号して金堂で和歌や茶道を嗜み、昭和19年（1944）73歳で逝去した。これより先、昭和12年（1937）準五郎が52歳で、翌13年（1938）富十郎が61歳で亡くなったのである。勝治郎と共に内地に戻った「渋久」久次郎も昭和20年、70歳で亡くなった。これにより、三中井の創業者である4兄弟は終戦までにすべて鬼籍に入ったのであった。

三中井を継いだのは勝治郎の婿養子四代目勝治郎（修吾）だった。勝治郎の姉の四男で慶応大理財科を中退して三中井に招かれたのであった。敗戦時35歳の若さで依然拡大主義のワンマン経営者だったようである。四兄弟の最後の生き残りである久次郎の「拡大するな、現状を守れ」との忠告にも耳を傾けることはなかった。4兄弟の息子たちとも不仲だったようで、創業者四人のような信頼関係は二度と構築されることはなく、これが致命傷になっていったのである。

三中井には敗戦のかなり前から、日本の敗戦が近いとの情報はもたらされていた。終戦の直前は軍事物資の売上がかなり大きかったからである。林氏によると、「敗戦後の三中井をどのように存続させるか」、コンティンジェンシー計画（環境変化に対応した戦略の選択肢を準備すること）を作った形跡が全くない。あったのは朝鮮・大陸での拡大という一辺倒の経営方針だけであった。時代の変化を企業経営に生かし、経営リスクを逸早く避け・分散するといったごく当たり前のことがまったく行われていない。だから京都の丸物百貨店の買収や下関市からの三中井下関店開店の申し入れを、いともあっけなく断ってしまえたのである（林著『幻の三中井百貨店』からの引用）

昭和20年（1945）8月15日、京城では朝鮮人が解放を喜び「万歳」を叫んでいた。三中井京城店では朝鮮人社員が日本人経営者に対して「これからこの店は我々のものだ。日本人は出ていけ」と告げ、店を占拠した。大邱や平壤、大田でも同様のことが起きた模様である。三中井は一夜にして、

朝鮮に渡った 1905 年から 40 年かけて築き上げた百貨店網をすべて失ったのであった。

## 8. その後の三中井と纏め

三中井百貨店京城店は、しばらく朝鮮人が営業していたが、商品の仕入れが続かず、在庫商品が叩き売られて、その後米軍に接収された。建物も後、道路の拡張計画により取り壊されてしまった。四代目勝治郎は引き揚げてきたのち、朝鮮・満州から戻ってきた社員の面倒を見ようとして、手っ取り早く金を作ろうとして株に手を出し、莫大な借金を背負うことになったという。その後、金堂を離れ、京都・鞍馬で養鶏を始めたもののこれも失敗して失意のうちに 47 歳で亡くなったのだった。

四代目勝治郎の義弟中江悌一は昭和 24 年（1949）彦根に一家で移住、煎餅屋を始めた。近隣の家庭や農家の人の持ち込む配給の小麦や砂糖を原料にして煎餅の「委託加工業」のようなものだったようである。その後、洋菓子店に転向したが、京都の老舗から職人をいきなりスカウトしたという。当時の彦根には洋菓子店は一軒もなく商売はなかなか大変だったらしい。軒先に掲げられた「三中井」の看板には老舗の風格が漂っており、これは三中井百貨店の新築落成の時に配られた手拭いのロゴをそのまま使っているからである。看板商品は『オリンピア』というロールケーキで、職人の道を選んだ主人の苦心の作であった（彦根商店街公式ガイド：彦根商店街連盟発行から）

三中井四兄弟は、零細商人から身を起こし、短期間で「朝鮮・大陸の百貨店王」にまで昇りつめた。しかし、日本の敗戦という事態に直面し経営基盤を失い、三中井百貨店は瓦解した。「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方よしの精神、企業は社会の公器という理念は継承されなかった。あまりにも急激に成長したため、四代目に限らず人材育成が追い付かなかったのであろう。

それでも明治・大正・昭和という激動の時代に、朝鮮半島という舞台で命がけで頑張った人たちの勇氣、そして歴史に名こそ残さなかったものの近江・彦根の町でしっかりと根をはって、先人たちの思いを引き継いでいく。はるかに歴史を感じつつ、大いに感動を覚えるのである。（完）

### 【参考文献】

「幻の三中井百貨店」（林廣茂著：晩聲社）

「中江四兄弟と三中井百貨店」（近江商人博物館編集）

「近江商人学入門」（末永 國紀著：淡海文庫）

「韓国併合」（海野 福寿著：岩波新書）

「日韓併合の真実」（別冊宝島 2230 号、宝島社発行）

「朝鮮紀行」（イザベラ・バード著、時岡敬子訳：講談社学術文庫）

この他ウィキペディアの資料を参考にした